

Native Writing Systems in the Okinawan Islands

その他のタイトル	沖縄諸島の土着書記体系の研究
学位授与年月日	2016-03-03
URL	http://doi.org/10.15083/00073189

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 ローザ マーク

(ROSA, MARK)

本論文は、バラザン（ワラザン）、スーチューマ、カイダ字など沖縄諸島の様々な土着の書記体系（writing systems）の歴史的展開を、現在まで残されている一次資料と明治期以来の先行研究の精緻な分析を通じて考察したものである。

まず第1章で、土着の書記体系を特に発展させた八重山諸島と与那国島を中心に沖縄諸島の言語状況を概観する。続く第2章で田代安定、Basil Chamberlain、郷土史家たちによる先行研究を検討し、最も活発に書記体系の革新が起きた八重山諸島と与那国島については、アクセスが困難だったこともあって資料が少なく研究も進んでいないことを確認する。第3章では薩摩支配下の琉球王朝による課税の実態が詳述され、米や布などの貢納の強制、さらには官吏による貢納量の増しを土着の書記体系の発展の重要な要因と結論づける。書記体系の分析が始まる第4章では、古来、沖縄諸島で計数のために使われてきたバラザンの分析が主題となる。一部の地域における藁の結び方の工夫を通じた数量以外の表現の試みが明らかにされるが、同時に結縄による表現の限界も指摘される。第5章と第6章ではやはり数量表現のために発展したスーチューマについて、先行研究の資料の再分析や新たに見出した資料の分析を通じて、現地の必要性に応じて細やかな工夫が積み重ねられていたことを示す。続く第7章では家を示す印として現在も使われるダハンを取り上げ、郷土史家による調査結果を踏まえてその構造や発音を考察する。第8章では、これまで分析してきたスーチューマ、ダハン、中国や日本本土由来の文字、さらには土着の約80種類の絵文字を統合したカイダ字の体系が分析され、続く第9、10章で新資料の解読が試みられる。そして、カイダ字が沖縄土着の書記体系としては最も表現力を高めたものの、表音性を備えるには至らなかったことを指摘する。最後の第11章では明治以降のカイダ字の衰退過程が分析され、ほとんど実用性を失った現状が示される。さらに、付録として著者自身が考案し本論中でも使用されたカイダ字のフォント入力システムの解説、さらにUnicodeへの追加提案の素案が載せられている。

本論文は、沖縄諸島土着の書記体系の歴史的展開に関するこれまでで最も総合的な研究である。資料が少ないために論証は困難を極め不確定な部分も残るが、丹念なアーカイブ調査やフィールド調査に基づき、また他の地域の書記体系の研究を参照することによって、説得力のある分析を展開している。

よって、審査委員会は全員一致で、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断する。